

謹 啓

皆様のご支援とご協力を得て、進めてまいりました
第13回関西建築家新人賞が、この程その審査を
終了し受賞者が決定いたしましたので別紙の通り
発表いたします。

2021年4月14日

公益社団法人 日本建築家協会近畿支部
支 部 長 津 田 茂
表彰委員会
委 員 長 江 副 敏 史

発 表

■第13回関西建築家新人賞 受賞者（2人）及び審査に提出された作品

○白須寛規（しらす ひろのり）

design SU 一級建築士事務所

（大阪市中央区上本町西 4-1-68）

日本建築家協会（JIA）正会員 1979年生れ

作品名「並びの住宅」

用途	構造	延床面積	所在地	竣工年
戸建住宅	在来木造	T邸:109.59 m ² O邸:88.73 m ²	大阪市東住吉区	2019年

○山口陽登（やまぐち あきと）

株式会社 YAP 一級建築士事務所

（大阪市中央区上本町西 4-1-68）

日本建築家協会（JIA）正会員 1980年生れ

作品名「一乗寺の住宅」

用途	構造	延床面積	所在地	竣工年
専用住宅	スケルトン:RC造 ジャイアントファニチャー:S造	67.63 m ²	京都市左京区	2019年

■審査経過の概要

- ・JIA 近畿支部による関西建築家新人賞は近畿支部地域で活躍する45歳以下のJIA会員に対し、設計活動に携わる意欲に満ち溢れた建築家の育成と発掘のために設置しています。今回はその第13回目であり、2020年11月27日に募集を開始した。（2021年1月12日締切）
- ・今回の募集は、近畿支部地域内に2015年1月1日～2020年10月31日迄の間に建てられた建築1点の建築活動を行った建築家に対して与えられるものである。（別紙応募要項参照）
- ・受賞者には JIA 近畿支部から賞状が贈られる。
- ・審査員は以下の3氏で構成。
畠山文聡氏（審査員長）、忽那裕樹氏（審査員）、荻原廣高氏（審査員）が審査を行った。
- ・募集締切の1月12日までに12人の応募があり、オンラインによる書類審査及び5人の作品についての現地審査を行った。
- ・審査は順調に行なわれ、3月23日に受賞者を決定した。

■発表

- ・本表彰委員会は本日（4月14日付）をもって報道関係（新聞、雑誌等）への発表を行う。

第13回 JIA関西建築家新人賞 審査講評

審査員長／畠山 文聡 Fumiaki Hatakeyama

「関西建築家新人賞」はJIA近畿支部に所属の45歳以下の建築家から「地域性」「芸術性」などから将来性があると期待される建築家に対して与えようとするもの。とされている。

よって作品及び建築家の言説を通じて見え隠れする「建築家としての視座」を見極めようとした。審査員2名には忽那氏・荻原氏にお願いした。忽那氏はランドスケープデザイナーであると同時に「デザインという行為」自体を民主化する実践者でもある。荻原氏は環境設備エンジニアであると同時に感性領域をデザインする改革者でもある。

12名の応募があり全てが住宅（集合住宅含む）であった。

書類審査においては統一した審査基準を設けず各々の「視座」で審査を行った。1回目の評価では9名に絞られ、2回目の評価では各々の「視座」を掛け合わせることで5名に絞り現地審査を行うこととした。この掛け合わせを通じて、総合点が高いことよりも作家としての独自性と実空間の悦美性が共通した審査方針となった。

「並びの住宅」白須寛規（新人賞）

商店・住宅が立ち並ぶ雑多な街に、既にそこにあったかのように存在している。その立ち現れ方は、都市の中での建築行為が異化性ではなく流動性であろうとする建築家の意思を感じる。分棟・雁行・勾配屋根・スキップフロア等の所作によって質の異なる多様な領域が生み出されている。中間領域は「差込」「開放」「垂下」「軒出」「囲込」と個別解としての操作が多彩に行われており緻密で誠実に空間化されている。しかもこれだけ多様な所作を行っているにも関わらず、空間相互が心地よく呼応し「ひとつの浮遊する空間体験」であった。

「四畳半キューブの家」濱田 猛（次点）

全ての室を四畳半とすることで新しい住まいの有り様を探ろうとする建築家としての強い挑戦的な意思を感じる。図（室）の散在的配置により地（余白＝中間領域）を生みだしている。図では親和性のある関係性がつくられ、地では内外をあいまいとしている。人工地盤状に生活の場を立ち上げ、屋根を浮かせる明快な構成が、「サイズ画一化による多様性」を生むことを成功に導いている。この逆説的創造性と空間スケールは素晴らしく、結果として、挑戦的でありながら原っぱの中で生活するような優しい大らかさを獲得している。（夏季における環境的側面で評点が下がったことが大変惜まれる）

「湖東の家」 鳥野良子（次点）

美しい田園風景・山並・湖・夕陽。これらの豊かな敷地に対して建築的所作を敢えて抑制的に留め、自然という大地にそっと間借りをしているように存在している清らかな建築であった。この清らかさ故に風景の織りなす豊かさが建築空間に全て溶け込んでくる。

居間やインナーテラスは風景を包み込むような優しい空間性をつくり出している。アプローチや庭のスケール感。少しだけ浮かしたFL。西陽と呼応する開口部や天井の目地。多彩な空間技巧を操っているにも関わらず、技法が消失し建築としての「素」の状態が浮かびあがり、原初的美しさを獲得している。静かで永遠と続く脈動を感じる美しい建築であった。（自身の作品を客観的に言説化できれば建築家としての更なる飛躍を感じた。）

「西景の家」 西井洋介（次点）

「西向きの田園風景のうつろいを取り込むこと」と「集落における建築の有り様」を模索して計画されている。15° 角度が振られた2つの帯状ボリュームとその間に生まれた場は広がりと共に親密性のある豊かな空間を獲得している。特にキッチンから居間を通じて外部へとつながる立体的空間連鎖性はここでしか得ることのできない体験であり、まるで田園風景を優しく手をひろげて受け止めるような優しさに満ちていた。季節・時間・天候によって刻々と変化する自然のふるまいに対して、建築家としての高いエンジニアリング力をもって極めて忠実に解法を提起している力作であった。

「一乗寺の住宅」 山口陽登（新人賞）

細いフレームを挿入し入れ子状の空間性を付与することで、画一的なマンションの1室の中に領域性・回遊性・多層性が立ち上がっていた。建築家の言説からは挑戦的姿勢を感じていたが、実空間は真逆で住み手のふるまいが「巣」に絡まり独特の心地良さが結晶化していた。25mmの線材・合板による面材が巧みに編み込まれており、生活という営みの罫線になりえている。都築響一氏が東京スタイルで示した「住み手独自の居心地の良さ」がここでは悦びに溢れた風景として昇華されている。

現地審査を経て審査員合同にて協議を行った。

作品を通じて垣間見える建築家としての視座と実力を振り返った。建築文化における社会性や空間悦美性や身体性について議論を深めた上で、作品ではなく建築家を選出する賞であることを再確認。評点が割れる場面もあったが議論の末、審査員全員合意の上、白洲寛規氏と山口陽登氏を第13回「関西建築家新人賞」に決定した。

白洲氏は個別性と全体性を相互に行き交う空間づくりに長けている。建築に「新しい衣」を纏わせる所作は独特であり緻密である。街のような多義的空間をつくる兆しを感じた。

山口氏は強い社会的職能としての意思を持ちながら、一つ一つのふるまいに真摯に向きあう2面性を持ち得ている。建築を通じて新しい文化を生み出す可能性を感じた。

近現代の建築は「屋内外の連続」が共通する課題のひとつであるが、現地審査の5件は図らずもこのテーマに対して向き合った空間形質を持つものでした。新人賞であるが故にクオリティが現地審査では優劣をつけると予想していましたが、いずれも素晴らしい作品群でした。またU45で秀作を生み出す力量はいずれの建築家も称賛に値するものであり大いなる可能性を感じました。（最終選考にもれた建築も評価に値する作品であったことを申し述べておきたい）

最後に、「すまわれかた」がいずれの建築主様も感動的であり美しい光景でした。

現地審査に快くお応え頂きました建築主の皆様にご心より感謝申し上げます。

審査員／忽那 裕樹 Hiroki Kutsuna

5つの住宅は、敷地の持つ環境資産、周辺地域の魅力を取り込むチャレンジから生まれる個性を有していた。設計者それぞれが、施主との対話を大切にして臨んでいたことが、現地視察の短い時間の中にも感じられ、とても好感が持てた。施主の暮らしに対する思いや、こだわり、使いこなしが素晴らしいのだが、それに頼り切ることなく、新しい暮らしを支える建築の姿を、もう一段模索する必要もあると思われた。暮らしに対するリテラシーが、情報社会の中で高まっているが、だからこそ、WEB環境から得られる知見を超えた住まいの在り方を、周辺の風景と対話しながら生み出してほしい。

「並びの住宅」

雑木の庭を囲む形で建つ二つの建築が、お互いの暮らしの違いを認めつつ尊重しあう状況を支えている。屋外環境と各々の部屋の間隔を少しずつずらしながら、丁寧につなげることで、設計者の言う「境界を越えたまとまり」を生み出すことに成功している。季節の良い時期には、手入れの行き届いた庭とのつながりをゆっくり堪能できる。暑さ寒さが厳しい時期の建築環境にさらなる工夫が求められるが、樹林環境の更新も考えている住まい手の住みこなしと共に育っていくことを願う。

「四畳半キューブの家」

住宅に隣接する農地と繋がった大きな縁側を作ったことが、住まい手に豊かな暮らしを提供している。その場所に四畳半の空間を配置することで生み出された「広場」と「路地」が周辺の風景と連続し、違ったスケールを室内に取り込んでいる。敷地と隣接地の地形を生かした成果であろう。室内環境の調整に手間がかかり、暑さ厳しき時期の西日対策など改善の余地があるが、家族の成長に合わせて使いこなしていける四畳半モジュールの展開を評価したい。

「湖東の家」

湖の側に沈む夕日を気に入った建て主のために、西側の風景との関係を丁寧にかつ、シンプルに構成した建築である。ダイニング、キッチン、和室、そして半屋外のテラスなど、過ごす場所によって風景の見え方が変わり、田園風景と共にある暮らしを提供している。寝室や子供部屋に対して、この場所における工夫が見られないのが残念であるが、田園風景から見

た建築の姿が、端正な佇まいを見せていて、この敷地に住むことの誇りにもつながると感じた。

「西景の家」

伊庭の地に生まれ育ち、愛着を持って住むことを決めた施主に、周囲の集落の風景ともなじむ佇まいを提供している。周辺の田園地帯の風景を取り込むという要望と、建築環境の快適さをバランスさせる工夫が、季節を問わず展開されていて素晴らしい。ダイニングキッチンから居間の空間と屋外環境に至る軸線に柱があるなど、少し違和感があったが、大きな居間の空間と諸室の関係が明快で、スケールの違う場所を使いこなしていける暮らしやすさが生み出されている。

「一乗寺の住宅」

風が通り、柔らかな光が差し込む部屋の中に、瓜生山の緑が飛び込む環境。マンションのリノベーションの結果、生み出された風景である。築40年のRC造のスケルトンの中に、設計者が「巣」と呼ぶ、ミドルスケルトンを挿入し、クライアントの生活スタイルを徹底的にヒアリングして居場所を配置した成果である。次の持ち主をイメージして、将来、環境の資産と言えるものになるリノベのチャレンジを評価したい。マンションの一室で豊かな周辺の風景を愛でる住まい手の姿に、この空間の「巣」が引き継がれていく予感を得た。

審査員／荻原 廣高 Hiroataka Ogihara

環境工学、環境デザインを専門とする背景から、周辺環境から屋内環境に至るまで四季を巡る変化やその居心地について想像力を働かせ、審査に臨んだ。現地審査に伺った下の5件は特に、屋内外をまたぎ多様で心地よい居場所を生み出しており、ライフスタイルの変化を求められるポストコロナ時代にもその豊かな生活を支えることができるであろうものばかりであった。

「並びの住宅」

それぞれの住宅における独立性を確保しながら、巧みなボリューム操作によって生み出される屋外空間や二棟間の緩やかなつながりが心地よい。O邸の内部では方位に対する適切な応答が柔らかい自然光の移ろいを映し出している。T邸では、屋内外の空間を緩やかにつながりながら水平方向にも上下方向にも多様で選択性に富んだ居場所が現れている。

「四畳半キューブの家」

周辺の地形や環境を切り取るような人工地盤と屋根が、力強く印象的な水平線を作り出している。その間には四畳半のキューブがランダムに配置され、広場や路地と呼ばれる空間が緩やかにそれらをむすぶ。屋外をめぐるテラス、半屋外の広場や路地、そして可変性や伸張性を持ったキューブ、さらには街とつながる人工地盤下空間と、幾重にも重なる微気候が巧みにそれぞれの関係性を補完している。

「湖東の家」

複雑な空間造形には至らず、湖に向いて沈む美しい夕陽とその時間を切り取ることにフォーカスした潔さに好感が持てる。風景とリビングの間に設けられたバッファでは、夕陽の映える天井が豊かな時間を効果的に演出するだろう。夏になれば、水田に反射する自然光がまた違った季節感を演出してくれるという。加えて湿気に対する配慮、方位に応じたサンルームと、一つ一つが丁寧に周辺環境に対して呼応している。

「西景の家」

計画地の太陽経路を読んだうえで、屋内環境の在り方に応じて住宅の配置軸やジオメトリー、窓の配置を操作している。季節や時間に応じ異なる窓から差し込む、また塞がれる自然光の

制御が見事に解かれている。こうして導かれたボリュームはまた、玄関側から、そして田園側からの景観にダイナミックな表情を演出している。LDKを中心にした空間構成と、家族間での気配や距離を操作できる設えを含め、高い精度の機能性と合理性を認めることができる。

「一乗寺の住宅」

集合住宅のリノベーションだが、丁寧に建物周辺の自然環境を読み解き、屋内外をむすぶ入れ子状の空間構成によって採光や通風を室奥まで引き込んでいる。東西をむすぶクロスベンチレーションや、「巢」の壁表面を伝って伸びる光のグラデーションは生活に潤いを与える。またこの入れ子構造がつくる適度な領域性と連続性は、住まい手の身体性にも配慮されたもので、リノベーションにおける環境デザインの好例といえる。

新人賞の審査においてはその趣旨に鑑み、また各審査員の持つ多角的な視点から意見交換を行った。人や社会文化へ貢献すべく作品の在り方や、若手建築家の育成や発掘に重きを置き議論を重ね、二者を選定させていただいた。

最後に、このコロナ禍にありながら現地審査を受け入れていただいた建主様や建築家、そして最大限の安全性に配慮した事務局の運営に、心より感謝申し上げたい。